

餘程乘参り候。物見申儀一圓無之、度々色々の品御見せ被遊處、野村與三兵衛杯餘りむき事也、御無用可被遊と申。新戸御鹿狩の節、此御馬に被爲召、弓にて猪を射給ふ處、血出候を見、以の外に驚き、又藪中より猪出でけるに又驚き、其以後は犬の出るも木の葉の落るにも驚きたりと。又先年南部大膳大夫殿より参りける御馬、甚御秘藏被成、新龍与御付被成、餘程はやき御馬也。但し笠をば以之外いやがり、金澤南の馬場にて被召、蓮池の方より被爲入處、きれて土手へ打つけ候事も有りし。或時小雨降候時分、御手笠にて御厩へ被爲入、御馬共に笠爲御具、新龍にもひたと御見せ被成。殊の外いやがり、から鼻をふき、尻込いたし、御厩より外へ御出被成處、御仲間走り出、新龍御馬おち候由申上。甚不審に被思召旨御意有之と。又先年櫻山と云ふ御馬を金子百兩に被召上。馬形、供前・頭持・地道乘・尾髮物で勝れたる能き馬にて、諸事揃ひたるとて、櫻山と御附被遊候。百兩と申馬代は、前後今之世にも會て無之、随分宜き馬ゆゑ右之通也。但し餘りよくつくり申故、供に強く當り候哉、一兩年之内に供足を痛め、さまざま療

治被仰付といへども不宣。其時分三浦勘左衛門別けて馬功者故、甚左衛門預り一療治仕見度との事にて、則御預け被成處、少々宜方に成り、町乗に出る處、足を折り倒れたり。畢竟種馬に被違由御意也。とあり。また葛巻昌興日記拔萃に、黒蘆毛の御馬足もはや、御秘藏にて、岩波と稱せらる。古今集貫之が歌に。
吉野川岩波高く行く水の
はやくも人を思ひそめてし
と有るに因りて、烏丸光廣卿馬の名とせられしを御採用ありしと也。
右貞享二年五月と七月の間に載せられけるよし見たり。此の外にも駿馬等の事彼是ありしかど、爰に略す。おもふに馬に名を付る事は、何れの世より初りけん。古事談に、宇治殿わか座しける時、花形といふ揚馬を牽りける云々。といふこと見たり。源平盛衰記に、いけづきは陸奥國七戸立の馬にて、馬をも人も食ひければ生暖と名づけたりと見え、又磨墨は頼朝の召置かれたる名馬にて、梶原景季に賜へり。黒き馬なりしにや。此の馬は世傳に隠岐國よ

り出づと、和訓栞にいへり。又源平盛衰記に、我が朝の名馬は三日月・和琴・鳥形・浦々・荒磯・望月・宮城・大甘子・小甘子・夏引・小鼻などなりとあり。右等の駿馬共は、何れの御世頃ならんか。姓氏録額田部河田連の條に、允恭天皇御世額田馬。天皇勅、此馬額如田町。仍賜姓額田部連。といひ、また額田部湯坐連の條に、允恭天皇御世。被遣薩摩國平重人。復奏之日獻御馬一疋。額有町形廻毛。天皇喜之。賜姓額田部也。といへる事見たり。駿馬の事は是等をば起源となすべきなり。

○馬乘馬醫博勢邸跡

舊藩中は、馬乘の諸士及び馬醫・博勢など、多分關助馬場の近邊に於て邸地を賜はり、また大身の藩士召抱の馬乘馬醫或は浪人博勢・町博勢なども、多分爰に居住せり。是いにしへこゝに馬市を立て、また馬術稽古の諸士も多分關助馬場へ出づる故なるべしといへり。馬乘の士は寛永四年の士帳に、

御馬乘衆
一、二百五拾石

宮北彌市右衛門

一、二百石 高桑七右衛門
一、百五拾石 金子右馬允
一、百石 矢田小左衛門
一、百石 嵯峨早之助
一、百五拾石 桑嶋内之丞
一、五拾石 金子十郎左衛門
一、五拾石 金子大學
以上八人也。また寛文十一年の士帳には左の七人あり。
一、三百石 小將組 賣馬役 絹川圓右衛門
一、二百五拾石 厩方組 賣方 高桑五兵衛
一、二百五拾石 同 賣方 清瀬武兵衛
一、百五拾石 同 賣方 金子久兵衛
一、百五拾石 同 賣方 原太郎左衛門
一、百石 石 同 賣方 潮田喜兵衛
一、三拾俵 外六人扶持 同 賣方 高橋九左衛門
又馬醫は寛永四年の士帳に、未相極不申衆。

一、八拾石 伯樂 福田三郎左衛門
寛文十一年の士帳に、